

主婦なのに満員電車でイケオジのクリ責め痴漢に理性を溶かされ、ホテルに連れ込まれて中出しされた話

サンプル（一部抜粋）

空がわずかに暗くなり始めた夏の18時。

いつもと同じように私は仕事を終え、今日の夕飯を考えながら駅のホームに立つ。今日も和食かな。

「洋食、重いんだよな。」

洋食を出すと必ず夫にそう言われ、残されるもんな。電車を降りたらスーパーに寄って、魚でも買うか。

主婦の頭の中はいつも家の事でいっぱいだ。自分の事ではなく夫の事を考えないといけない。

「…はあ…」

人知れず小さなため息をつく。

この後乗り込む帰宅ラッシュの満員電車で、身体がおかしくなるとも知らずに。

プルルルと駅のスピーカーから音が鳴って、電車が到着すると知らせるアナウンスが流れる。

私が降りるのは7駅先。ぎゅうぎゅう詰めにはもう慣れた。

大きな音と共に到着した電車にゆっくりと人が流れ込んでいく。一步一步地獄の動く密室に詰め込まれていく。

私も小さな歩幅で一步一步前に進み、駅員さんに押し込まれながらなんとか電車に乗り込む。

「……」

もわつと色んな人の匂いが混ざる。何度匂っても、嫌な匂い。

私は押し込まれた電車のドア付近に立つ。満員電車は真ん中が一番押しつぶされてしんどい。今日はドア付近で良かったと小さく息を吐きながら、なんとか閉められたドアに片手をつく。電車がガタンと音を立てて動き始める。見慣れた景色を見つめながら、電車の揺れで倒れないように窓についた手に力を込める。

ただ何事もなく7駅先まで行くだけ……のはずだった。

(中略)

内も手を撫でる手は私の抵抗など無意味だと思い知らせるように、ゆっくりと上に這い上がってくる……。

あなた、助けて……。夫を思い出し、必死で助けを求める……。

その瞬間、ごりつとクリトリスを指でなぞられた。

「っ…は…」

思わず息を吐く。

ぞくりと全身の毛が逆立つ。今までに経験した事のないような、鋭い感覚…。

夫とのセックスでは、簡単に軽くなぞられるだけのクリトリス…。そこを執拗にゴリゴリと太い指でなぞられている…。

下着の上から何度も何度もクリトリスをなぞり、指が行き来する度にぞくつと身体の内側が目覚めるように熱くなる。

「っ、や…」

腰を少し動かして指から逃げようとするのに、クリトリスをなぞる指は、私を逃がしてくれない。

ゴリッ…コリッ…と強弱をつけてクリトリスをなぞる指…。無関心な周りの人間。徐々に身体が抜けていく私…。

「…は…あ…っ…」

唇を噛んで、勝手に湧き上がってくる吐息を噛み殺そうとする。

こんな満員電車で…しかも痴漢されているのに…変な声を出すなんてあまりにも恥ずかしすぎる。

それに、こんな反応を痴漢に見せたら、喜んでいると勘違いされてしまう。これ以上エスカレートしないように……ちゃんと抵抗しなきゃ。

(中略)

身体がびくと震え、力を奪われる。

「……おまんこぐちよぐちよだね。」

後ろから小さく低い声で、そんな言葉が紡がれる。

私は慌てて首を横に振るけれど……おじさんの指がぬるぬると簡単にクリトリスの上を滑る。

「は……あ……はあ……」

必死で息を吐いて、声を出さないように耐える。反応しちやいけない。このおじさんの思い通りの反応をしたら、きつとただ喜ばせてしまうだけだ……。

目をぎゅっと閉じて別の事を考えようと意識をそらそうとした。

でも次の瞬間、クリトリスの周りの盛り上がった部分をくぱつと指で開かれ、クリトリスをむき出しにされ……触れるか触れないかの強さでコリコリとクリトリスの先端を弾かれた。

「あ……あ……は……あ……」

指がむき出しになったクリトリスの先端を弾く度に、びりびりとした強烈な刺激が叩き込まれる。

反応なんてしたくないのに、勝手に身体が震える。先っぽをそんな風に刺激しないで……
声を出さないように、必死で浅い呼吸を繰り返す。

「……もうビンビンになってるね。

可哀想に。イかせてあげる。」

クスクスと後ろから地獄のような宣言が聞こえる……。嫌だ……こんな……沢山人がいる場所でいき
たくなんでない。痴漢に、しかもこんなおじさんにイカされるなんて……屈辱的すぎる。

(中略)

その時、間もなく駅に到着すると車掌のアナウンスが流れた。

「……イきたい？」

耳元で低く……私の欲望を理解したような声が聞こえる。

「……」

イきたい……今イかなきゃ……身体も頭も変になっちゃう。

そう思いながら、ゆっくり、静かに頷いた。

「……次の駅で降りようか。

そうしたらクリトリスをいっぱい可愛がつてあげる。」

おじさんの執着に満ち溢れた真っ黒な声。その声は救いにも地獄への誘いにも聞こえた。
早く帰らなきゃ……帰らなきゃいけないのに……でも、この状態で？

こんなに中途半端な状態で…？帰ってご飯を作っていつもの虚無に戻るの…？身体はもう、次の駅で降りようと決断を下しているけれど…頭は違う。いろんな葛藤を抱えながら、自分を納得させる言い訳を必死で考える。

おじさんはこりっと軽く一回だけクリトリスを弾き、ゆっくり私の下着の中から手を引き抜いてしまった。

下着がクリトリスに触れるだけでピリピリと甘い刺激が流れるのに…こんな状態で帰れないよね…。

ガタンゴトンと電車の速度が落ち、駅のホームへと到着する。

扉が開いて、おじさんがそっと私の背中を後押しするように押す。

「……」

そのまま電車から一步押し出されてしまった私。

プシューっとあつという間に背後で電車の扉が閉まる音が響く。

「…いくよ。」

電車が動き出した瞬間、おじさんがそっと私の肩を掴む…。

「っ…」

去ってしまった日常を乗せた電車。まだ引き返せる位置にいらんだと、地面に張り付いた動か

ない足。

「……はあ。」

おじさんは、俯いて動かない私を見て、小さくため息をついた。

そしてぎゅっと私の手首を掴み、有無を言わせない威圧的な表情で

「いくよ。」

と短く低く言葉を発した。

(中略)

ズンッと重すぎる快感に、ハッと目が覚めた。

「ぐ……あ……」

「あ、起きた？」

ニヤツとするおじさん…。

「まだまだクリトリスは虐めてあげるから、安心してね。」

クスクスと笑う声と共に、ズンッと奥を突き上げられた。

「ぐ……あ……は……っ……っ」

息が出来ないほどの質量……。最奥まで届いた肉棒が、脳をかき回すように快感を身体へと刻み込まれる。

「なんで……っ……あ……だめ……抜いて……っ！」

クリトリスで散々気持ちよくなつたくせに、随分と都合のいい事を言っているのは、分かって
いた。

でも…確実に大きな一線を越えた事は狂った頭でも理解していて…、もし夫にバレたらと思う
と怖くてしうがなかった。

「…んー？抜くの？」

おじさんは少し笑いながらそう言い…、パンパンと激しく奥を突き始めた。

「ひ…ぐ…ああ…だめ、やだ…っ、は…ああ…」

夫とのセックスでは届くことのない、奥の奥…。そこを容赦なく突き上げられ、おじさんが動
く度にぐちゅぐちゅと淫らな音が部屋に響く。

「…こんなにトロトロに絡みついてくるのに…本当はもっとイきたいんでしょ？」

俺なら満たしてあげられるのにな。こんな風に。」

おじさんは激しくパンパンと腰を打ち付けながら、ゴリツと親指で私のぐちやぐちやになった
クリトリスをなぞった。

（クリ責め・クンニ・中出し…NTRの全容は製品版にて）